

千刈キャンプに思う

川 島 恵 美

関西学院とキャンプの歴史は古く、1925年に行われた中学部の三日月キャンプに遡ります。それ以来、キリスト教を根幹とする学院における教育の一環としてキャンプは大切な活動として位置づけられ、1955年に宗教活動委員会が中心となり、関西学院千刈キャンプが開設されました。千刈キャンプは、間もなく開設60周年を迎えようとしています。

現在までに千刈キャンプは、野外活動としてのキャンプの他に、授業やゼミの一環として、また部活やサークルの合宿、宗教活動としてのリトリート、教会キャンプ、学院内外の団体による研修、全国規模のネットワーク集会等々、様々な活用されてきました。

キャンプと聞くと、どうしてもテント泊、飯ごう炊さんといった野外活動のイメージが強いかと思います。もちろん、千刈は野外活動の場として最適でもあるのですが、それだけでなく、人里離れた森の中にありながら、快適なキャンピング、専属の炊さんによる美味しい食事、インターネットもつながる研修室も完備された、いわば「文化的孤島」という得難い環境の場所でもあります。

実は私は、学生時代に千刈キャンプに来たことは一度もなく、学院とは関係のないところで前事務長の岡さんと知り合い、千刈リーダーのトレーニングを依頼されたことから千刈と出会いました。1990年から夫婦でリーダートレーニングを担当し、その関連でリーダー達と共に新緑ファミリーキャンプのお手伝いをさせていただき、また1993年から10年間続いた「環境教育ネットワーク・千刈ミーティング」の運営に携わりました。1999年から、ご縁あって教員として母校に戻り、社会福祉学科の合宿でも千刈キャンプを利用するようになりました。その間二人の子どもが生まれ、多い時には、年に数回は千刈で過ごし、子どもたちも千刈キャンプっ子といってよい幼少時を過ごしました。

いつの間にか20年以上の時間が流れましたが、千刈の自然の懷に抱かれ、人知を越えた大いなる存在を感じつつ自らを振り返る時間は今も変わりません。千刈キャンプは「宗教道場」としての役割を与えられてその一步を踏み出しましたが、今後も狭い意味での「宗教」にとらわれることなく、多くの人々に開かれた「かかわりの場」「ふりかえりの場」「祈りの場」として活用されることを心から願っています。

(人間福祉学部准教授・千刈キャンプ所長)